

# がいりょう かいはつ 土地の改良と開発

河原の湿地帯や水の便の悪かった大門原の土地をどのように人々は改良・開発して現在のような農業地帯に発展したでしょうか、そのためには人々の大変な苦労がありました。

## てんじょうがわ 天井川って何？

河原は湿田が多く、また明治のころ堤防ができてから天竜川の方から入る水によって土砂が多くなり、外新田の方が高くなつたため、内側の方の田の排水が悪くなり困っていました。

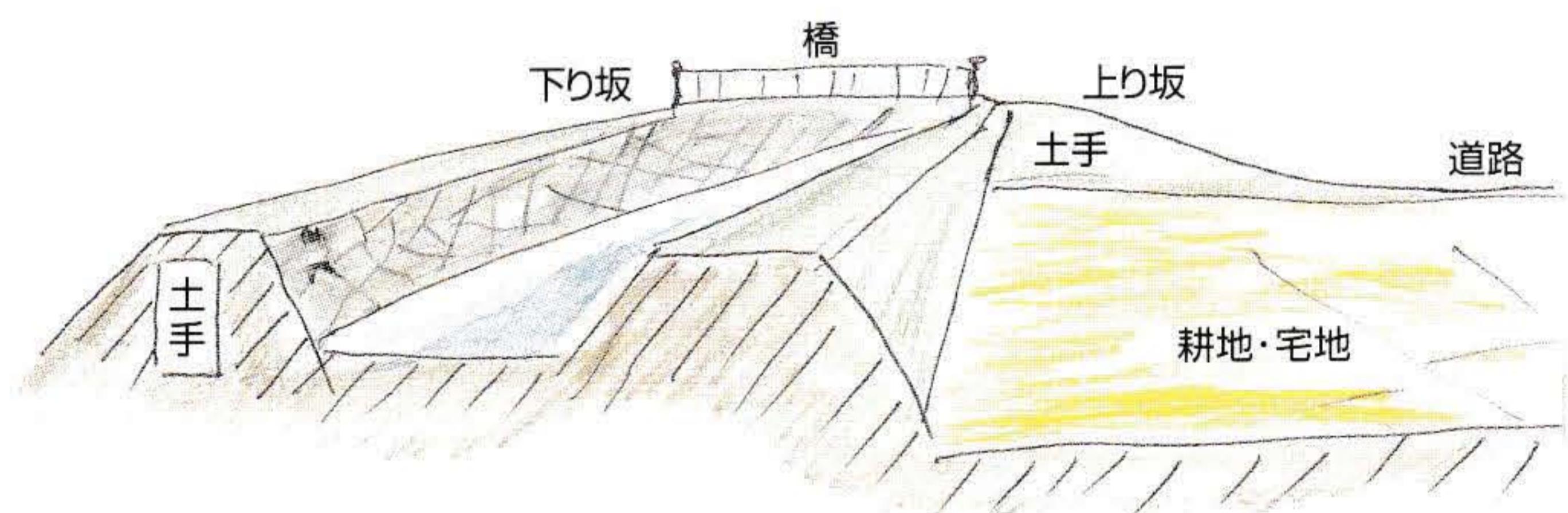
座光寺河原は、土曾川の堤防と南大島川の堤防に囲まれ、また一方を天竜川の堤防とで囲まれた低地でした。

このように、川床が耕地や宅地より高い川を天井川といいます。自動車に乗っていて、川に向つて上り坂になり、橋を渡つて下り坂になる川は、天井川と言えます。

天井川は稻作（米づくり）には、適していますが、川の方が宅地や耕地より高い為に水害があると水はけが悪く大変です。

日本の各地にこのような低地はあり、特に有名なのが岐阜県にあります。その土地のことを輪中集落といいます。輪中集落を探してその生活を調べてみましょう。「水郷」と言われる土地も調べてみるのもよいですね。

その天井川の様子は次の断面図のようになっています。

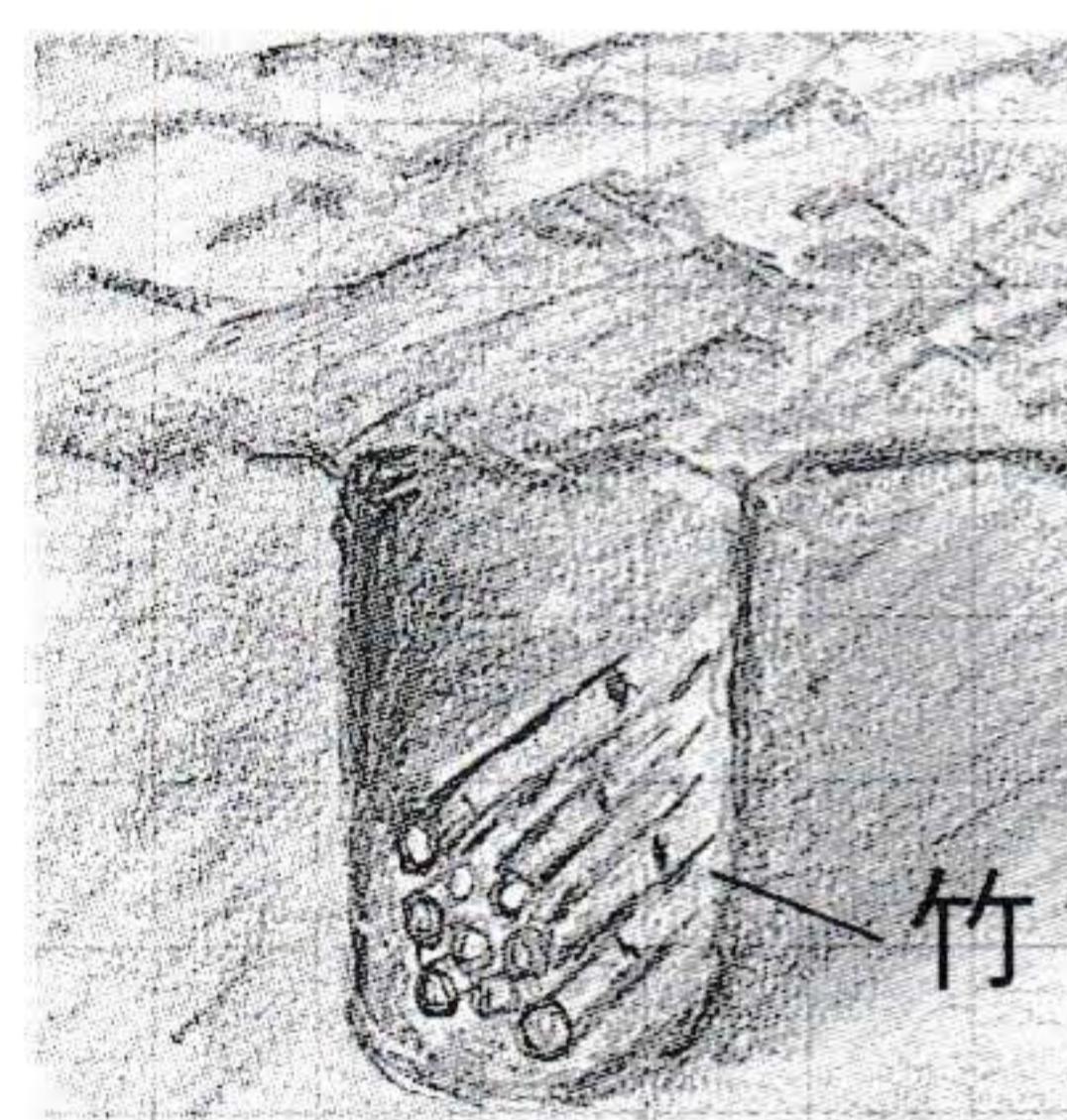


天井川の断面図

## 農業は稻作中心だった

天井川の地域は、水の便がよく米づくりが中心でしたが、河原は湿地で稻の単作地帯でした。

1876年（明治9年）座光寺の農業生産金額の60%までが米の産額でした。しかし、養蚕業に押され、段々と減少していきました。その後、また増えました。これは、



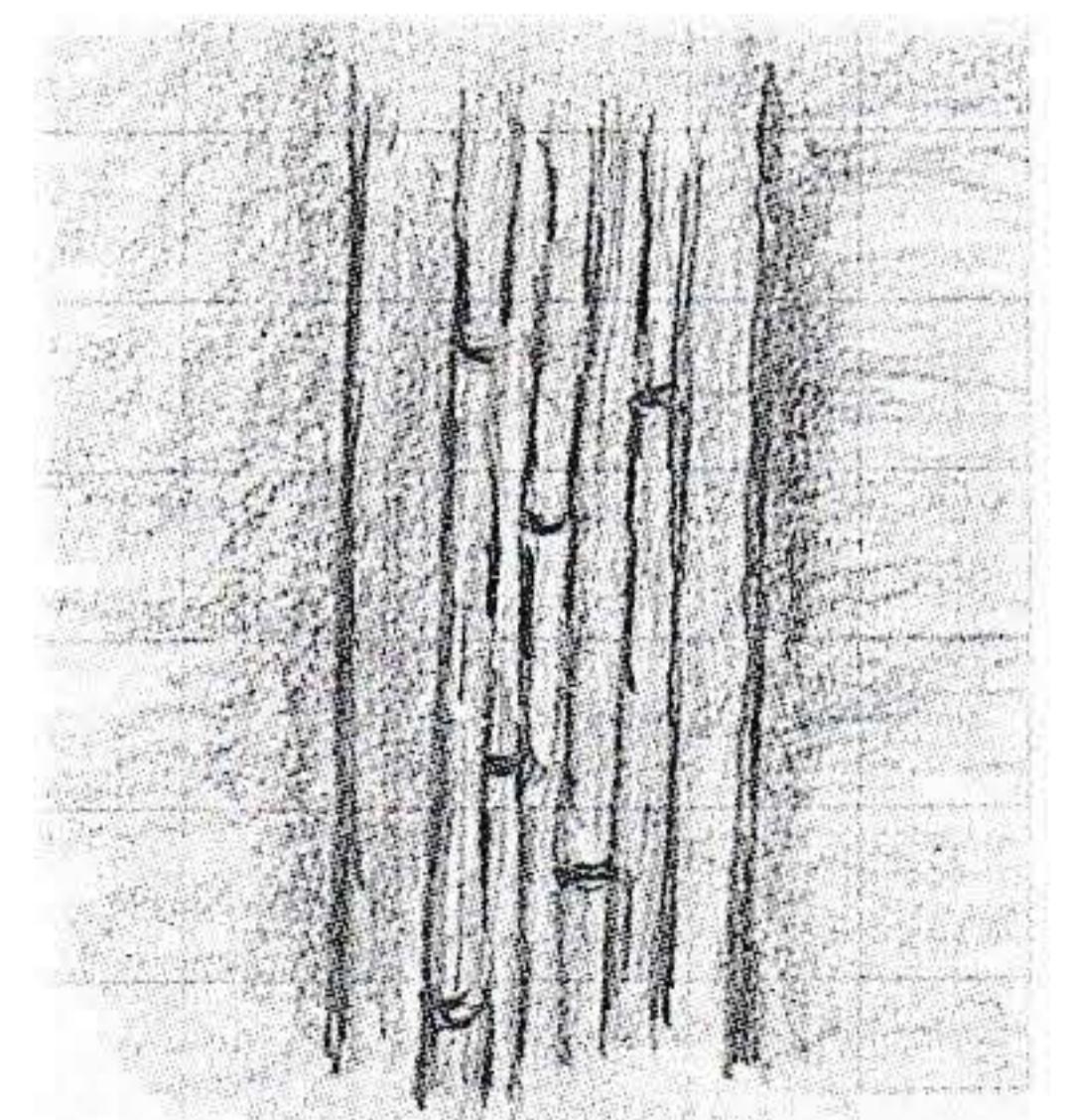
暗渠排水の断面図

戦時中の国の政策で食料確保のため増産を強いられたがためでした。戦後、稻の品種の改良・技術の進歩・改良によって増産に向いました。

## あんきょはいすい 暗渠排水って何？

戦時に食糧増産をしなくてはならなくなり、二毛作地帯とするために湿田の排水の事業に取り組みました。溝を掘り、そこに竹を何本も入れて水抜きをしました。

1942年（昭和17年）12月15日着工、座光寺地区の小学校児童から各戸1名以上出勤し、また、他の地区の人達にも応援していただき、1944年（昭和19年）6月15日に完成了。終了までに一戸平均130日も出勤しました。



上から見た暗渠排水





河原地籍土地改良事業（暗渠排水）1943年（昭和18年）

青年学校・小学校高等科の生徒の活躍が大きかった。

## 耕地整理事業

座光寺の河原地帯は、1946年（昭和21年）秋の水害後、3・4年おきに大小の水害を受けるので、同地区に耕地を持っている下羽場地区の人たちは、同地区20町歩の耕地整理を始めました。

耕地の区画整理事業は、1958年（昭和33年）頃から進められ、一貫水路の通水と同時に、灌漑用水も受け入れ水路を完備し、耕地整理によって圃場や道路を整備し、新しい農機具を取り入れて、有効利用により、労力を節減するなど、近代農業経営をめざしました。

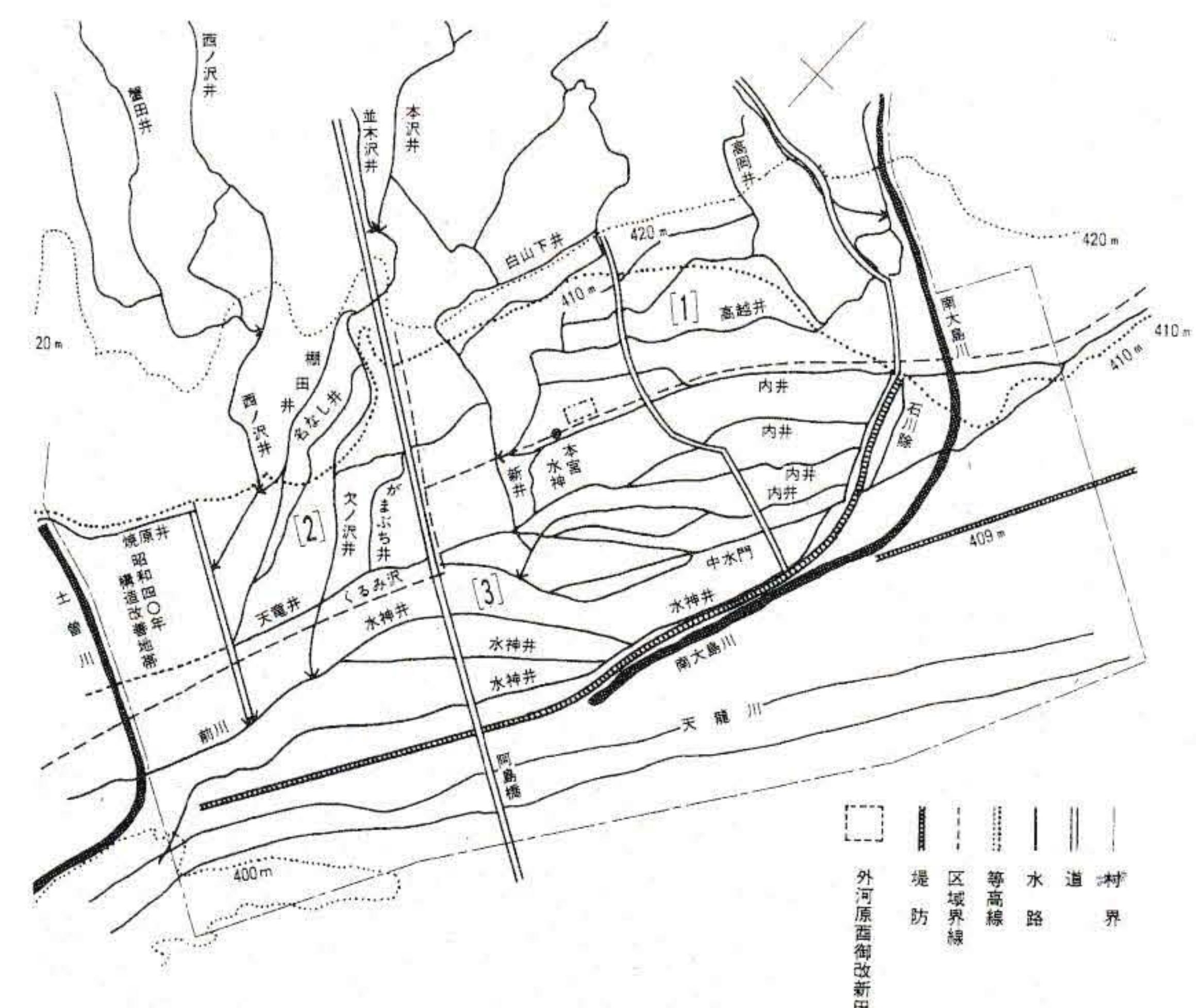


整備された中河原地区の用水路



欠野沢堰水量の調節のために作られた水門

これにより天竜川に排水される。



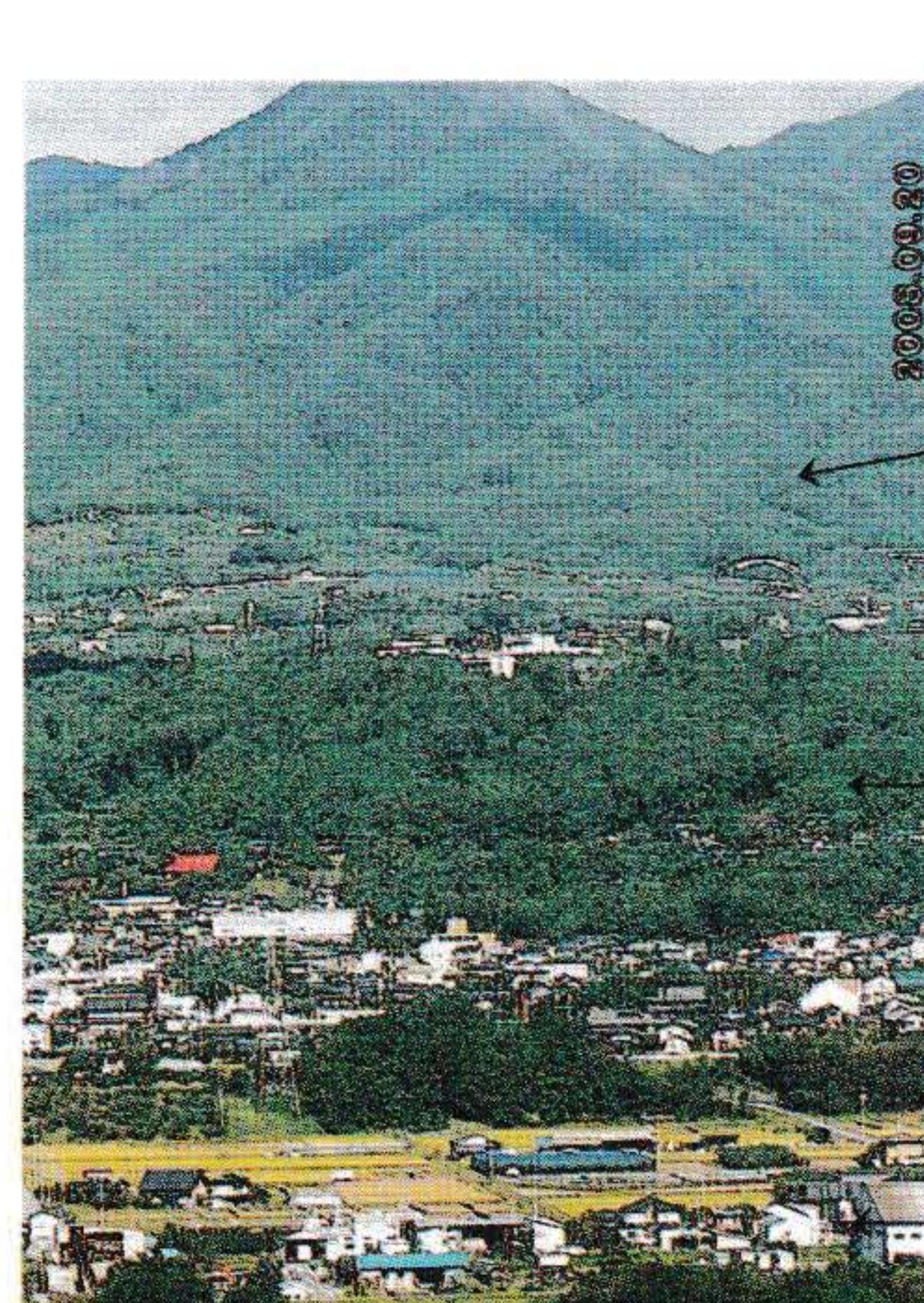
〈河原の排水事業の範囲と構造〉

改良工事記念碑には次のように記録されています。

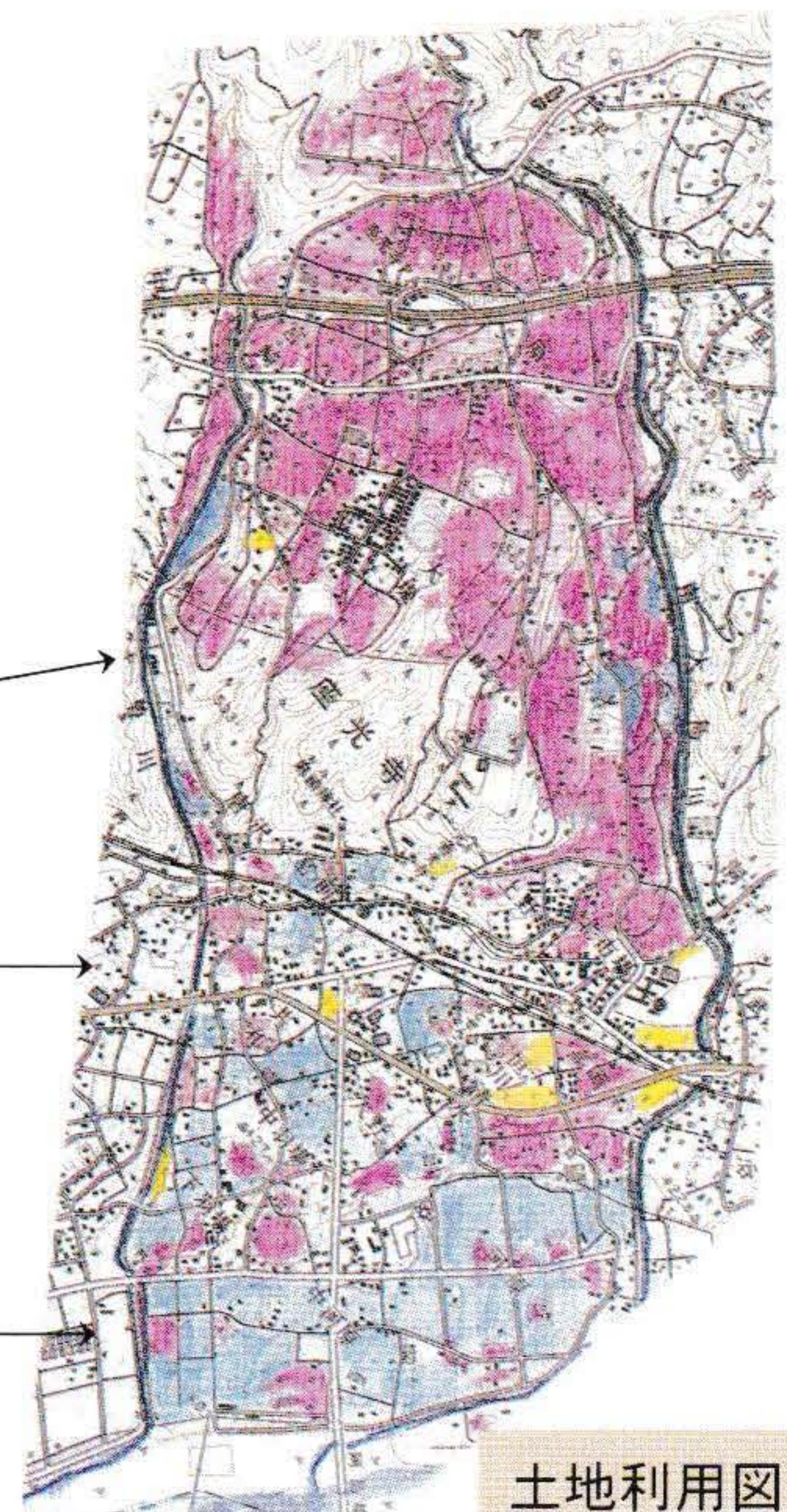
当河原一帯の圃場整備は過去に検討を重ねた経過を踏まえて、時あたかも農政の転換期の世情の中、地域振興と農業の安定を期して、1987年（昭和62年）にその準備を始めた。そして関係者一同意を決して旧来の水田を良田とすべく相計り、土地改良総合整備事業により圃場整備を実施し、その集団化と近代農業の確立を期し優良農地の確保に努めた。ここに事業の完成を記念しその概要を記録して農業の不滅を祈念しつつこの碑を建立する。



- ・総事業費 10億2千万円
- ・総面積 40ヘクタール



喬木より座光寺を望む



土地利用図

## 座光寺原\*（大門原）の開発は

江戸時代の末期より明治の初期にわたり養蚕事業の発達に伴い盛んに原野の開墾がなされ、桑畑が造成され、耕作がされました。

\*座光寺原…県道から下辺  
\*大門原…中央道から上辺

## 桑園から果樹園へ

化学せんいの発達に伴い生糸の価格が低めに低迷し、桑園から果樹に転換する農家が多く、上段を中心に一大果樹地帯になりました。

養蚕が盛んなころ、南本城地籍に祀られる古賀比神社は「蚕がい」飼する人々の豊蚕を願って祀られた神社でした。

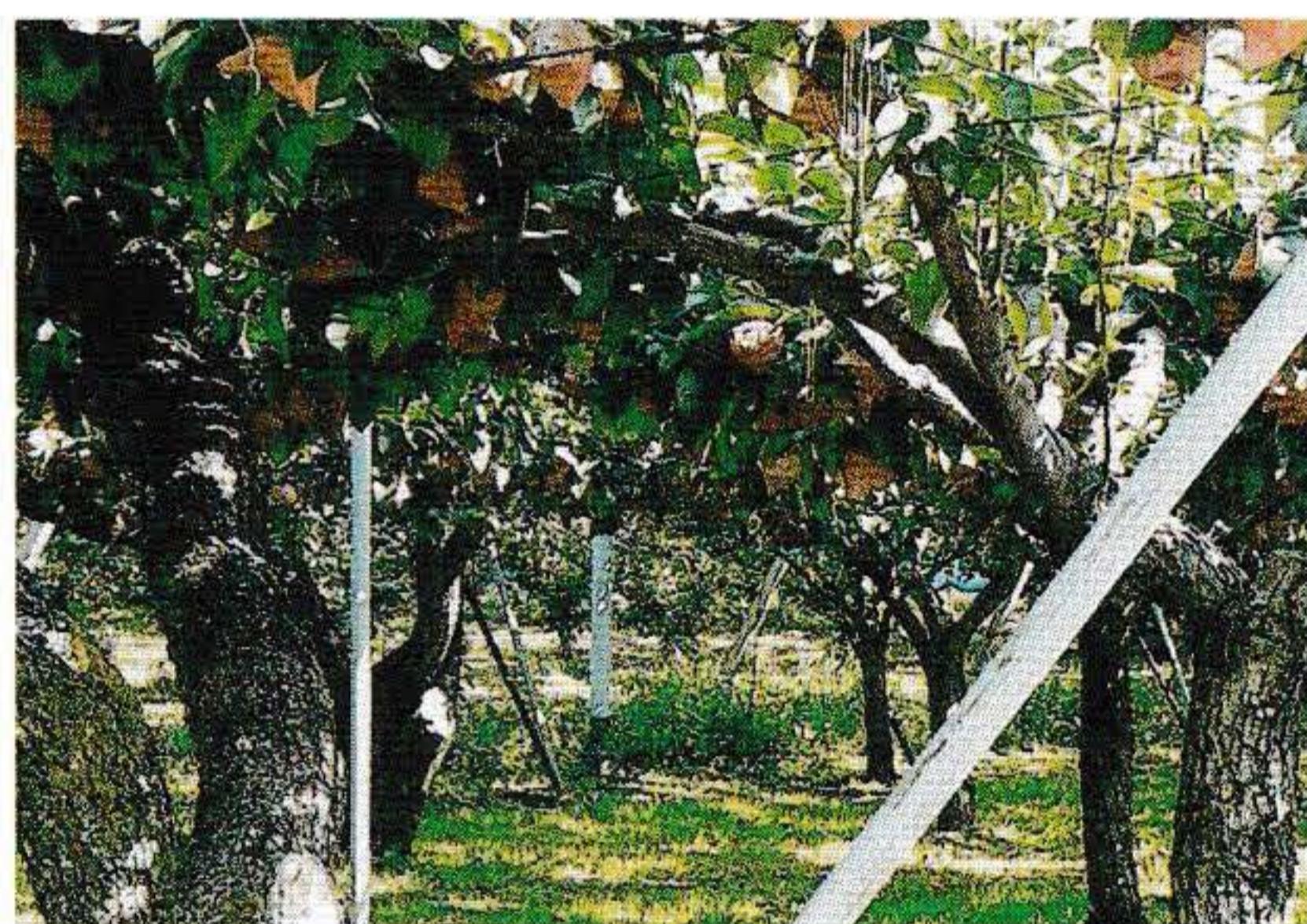
江戸時代から蚕靈様を祀ることは行われていたが、明治・大正時代の養蚕の隆盛と共にこの信仰は高まりました。1932年（昭和7年）村中の養蚕家の崇拜者により古賀比神社の奉祭が決まり、1935年（昭和10年）還座式が行われました。しかし養蚕の衰退と共に信仰も下火となり、2007年（平成19年）に神社は朽ちて危険になつたため取り壊され、新たに麻績神社横の公園に建立されました。昔の養蚕を利用されていた建物は、現在何に使用されているか調べてみましょう。

## お蚕さま？

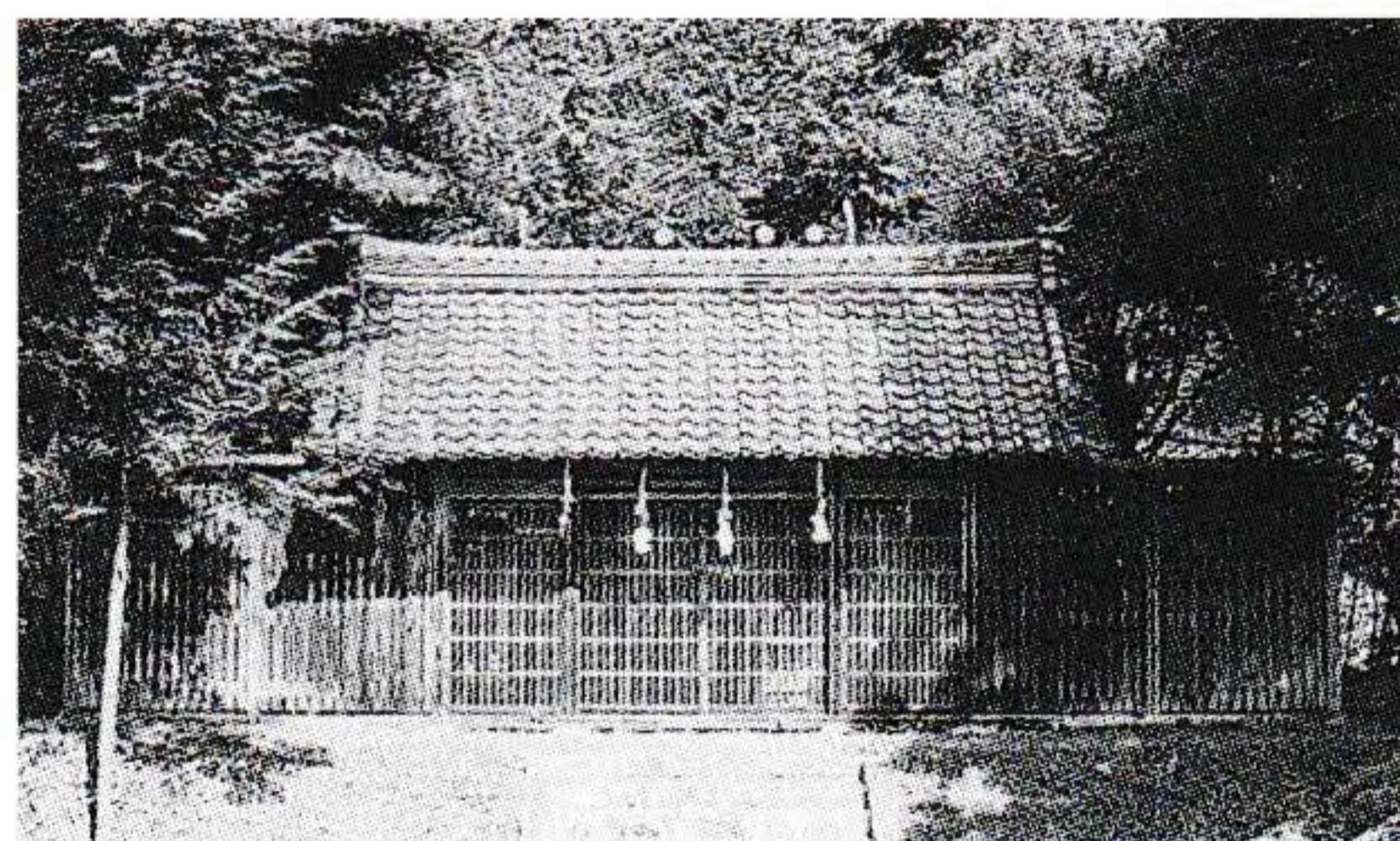
かつての養蚕は、農家にとっては一家の経済の基本でした。しかし当り外れが多く、蚕作の豊凶は一家の死活



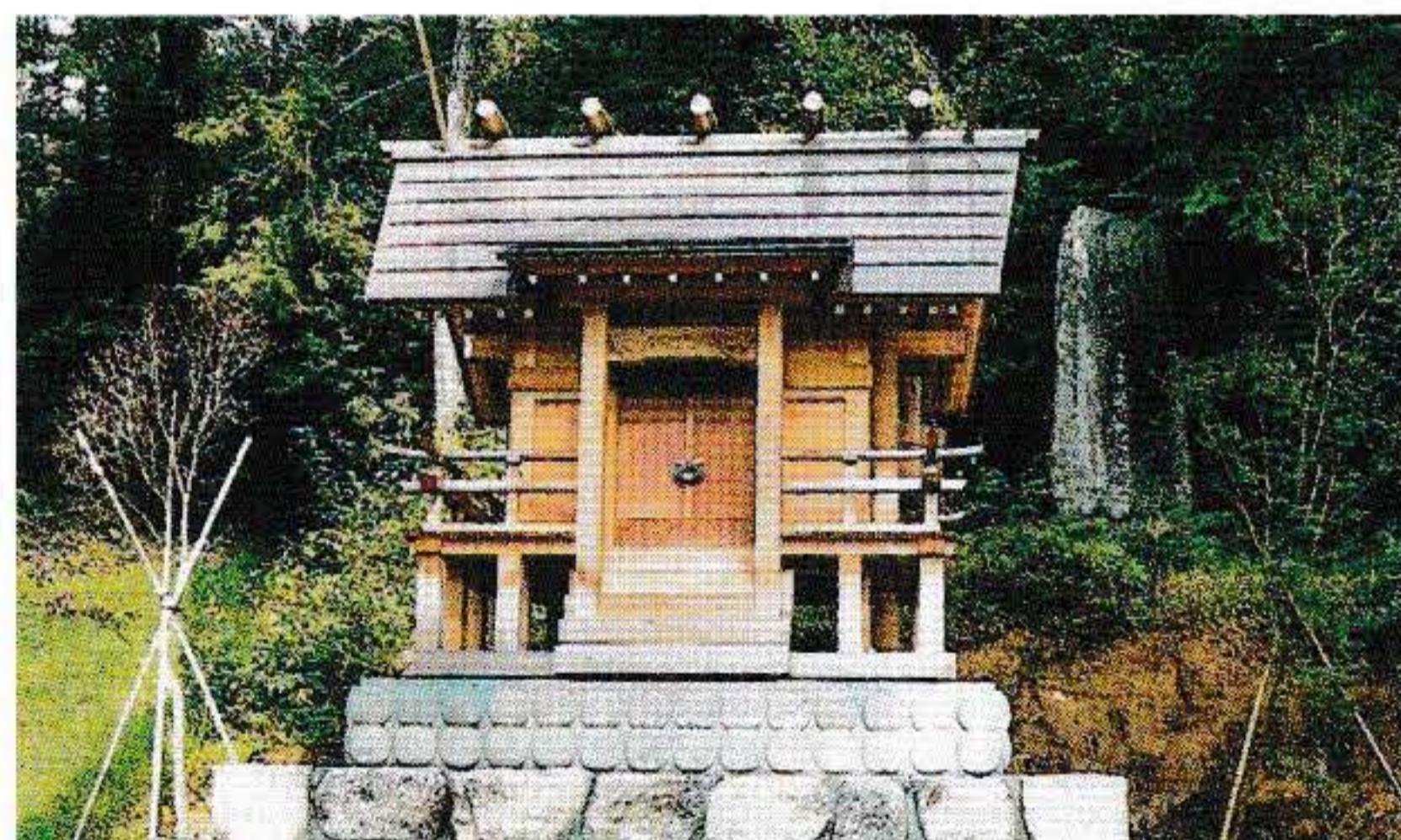
上段の果樹地帯（中央道附近より）



梨畠



養蚕の隆盛を願って建立された古賀比神社（南本域東側に建立されました）



2007年（平成19年）に建立された、新しい古賀比神社

問題でしたので、農家の人々は養蚕の豊作を神仏に求めました。座光寺だけでなく伊那谷の各地には蚕玉様が祀られ、それぞれの地域や講でおまつりをしてきました。座光寺では、古賀比神社として祀ったのです。また各農家では小正月に稻穂と繭を型どった餅をつくり、床の間のある座敷にかざり、稲の豊作と蚕作の安定を祈願していました。今でも旧家ではこの習慣を守り続けています。

これらのことから蚕のことを特に「おかいこさま」と他の農産物ではみられない「お」「さま」をつけています。如何に重要な産業であったかがわかります。

隆盛をきわめた養蚕業も世界恐慌のおりを受けて、1932年（昭和7年）には輸出の急減と価格の大暴落に見舞われた。そこで農家では、桑畑の一部を水田や他作物などへの転換をはかったのです。

### 座光寺の年次別養蚕戸数

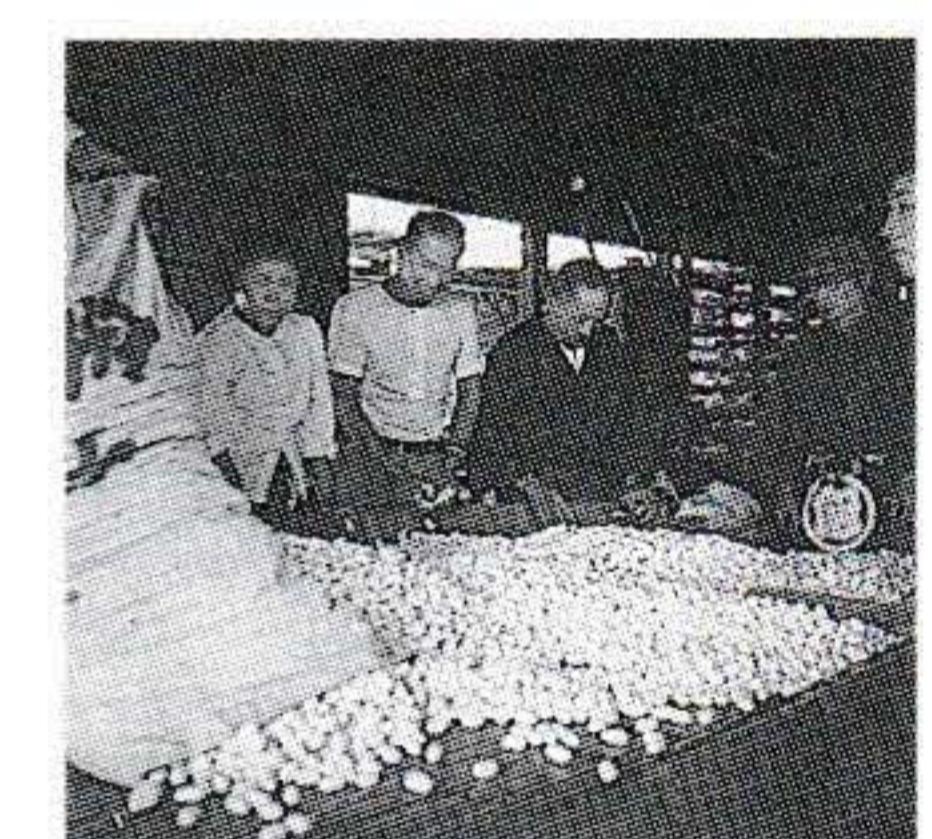
年次	S	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	H	1	2	3	20
戸数		86	77	51	51	43	41	34	32	30	26	25	21	18	17	9	8	7	7	1	

（大内智治）

### 豆知識

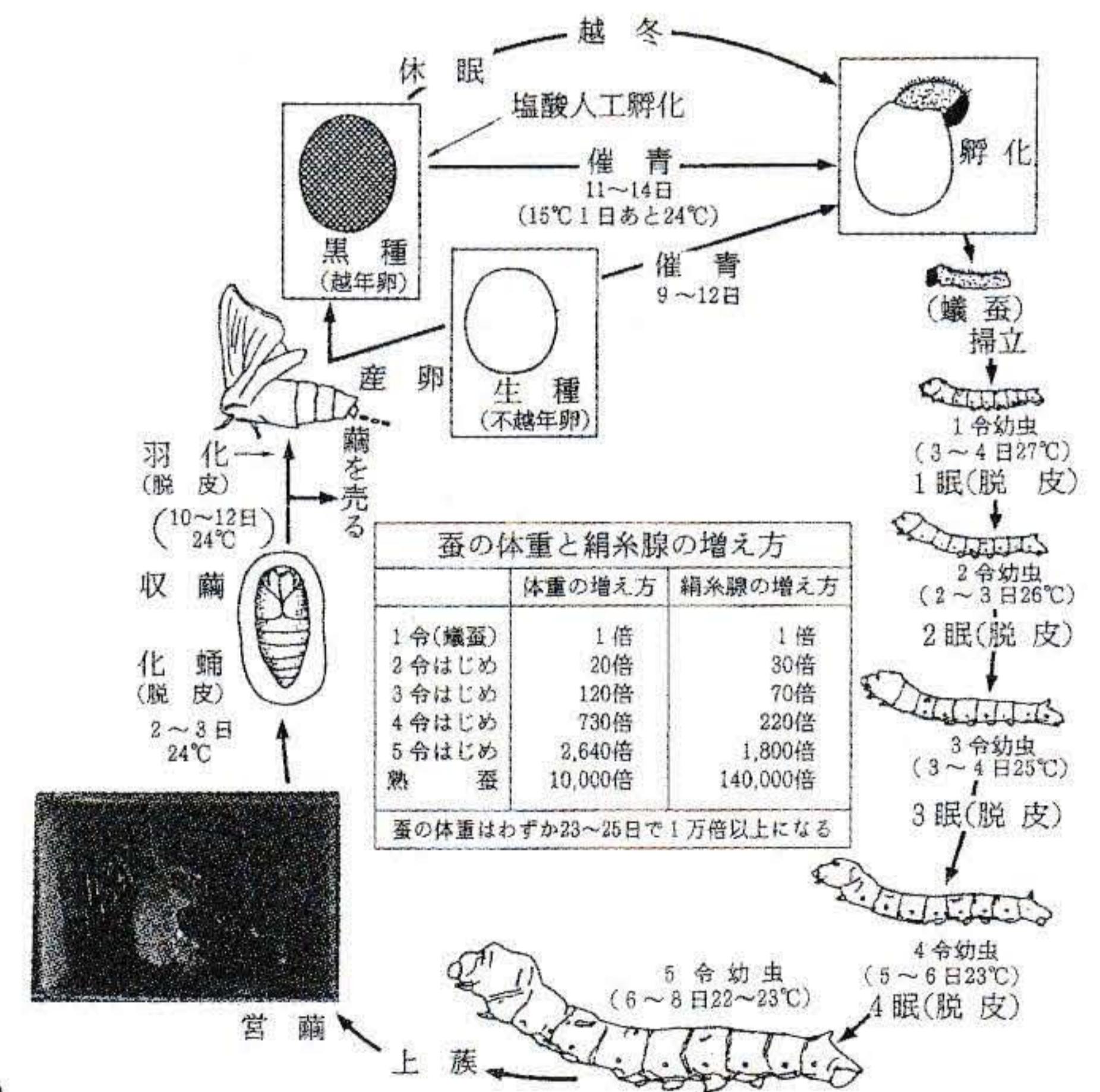
### ～蚕の一生～

蚕は卵で冬を越すが、春になって桑の葉が、4~5枚出た頃に孵化して蛾蚕になる。その後桑を食べ、4週間ぐらいの間に4回眠り、4回脱皮して熟蚕となり繭を作りはじめる。2~3日で繭が作られ、さらに2~3日して繭内で脱皮して蛹になる。蛹期間12日ほどで脱皮して蛾になる。



出荷風景

蛾は通常朝早く繭から出て、その日のうちに交尾して夕方から翌朝にかけて産卵する。その後4~5日後に死んでいく。



下伊那郡誌「地理編」より